テスト用紙

明治学院大学

〈ベトナム戦争と毛沢東中国〉

ベトナム戦争は米中和解のきっかけとなったものであり、それはアメリカの製造業の発展のきっかけとなったものでもあった。また、舞台はベトナムという場ではあるが、北ベトナム＝ソ連、南ベトナム＝アメリカという構造をとっており、米ソの対立が凝縮された戦いであった。そして、次第にアメリカの戦争へと拡大していくのであった。

ベトナムは北ベトナム（社会主義）、南ベトナム（資本主義）という形で17℃線を境に分かれていた。当時、毛沢東を指導者としていた中国はソ連と手を組むアメリカとは敵の立場にあった。敵のアメリカが一向に勝利できない状況を見こして、有利に戦いを終わらせようと考え、北ベトナムを侵略し、中国にもそのまま攻めてくるのではないかとおそれた中国は2つの政策を行う。1つは、沿海部から内部へ重化学工場を移す三線建設で、もう1つは文化大革命である。この2つを中国の「改革開放」政策という。

だが、このことを知ったアメリカは「敵の敵は味方」という手を使い、中国と和解し、中国をもソ連の敵にしようとした。アメリカのジョンソン大統領は中国には侵略しないと約束したので北爆せざるを得ない状況をつくり、中国と和解した形でソ連＝北ベトナムに対抗していく。

米ソの資本主義、社会主義の対立がベトナムにバイアスをかけ、中国を資本主義に移行させていったのである。ベトナム人にとってはアメリカは味方とは逆のものに見えていたかもしれない。1970年に南ベトナムが北ベトナムを併合し、ベトナム戦争は終結する。ベトナム戦争後の中国の動きとしては、1971年、キッシンジャーが訪れ、中国は国連加盟する。72年にはニクソンが訪中し、中国をお味方につけるためプラント30億ドルを与え、資本主義国交正常化を図る。75年には代表が周恩来に代わり、鄧小平のかかげた「4つの近代化」「4つの現代化」「工業20条」などが行われ、78年に「社会主義現代化」＝改革開放が進められ、中国はほぼ資本主義に移っていくのである。

〈感想〉

まず初めに全ての現代史を通して教科書に載っている歴史は1面りでしかないかもしれないが、見方や視点を変え関連性を見出すことで、文脈や絵や図からは見えてこなかったものや、違った物語を見て取れると思った。過去を終わったものとして、単発的なものとして捉えるのではなく今に至るまでの通過点としてつなげて捉えるべきだと思った。表立って見えるものは表面にすぎない、もう1度見つめなおすことによって見えてくることがあると学んだ。

今回の部分もそうだが、ベトナム戦争の二極対立の構造の裏には米ソ対立が根強く関連していて、その対立がまた別の国のあり方にまで変化を及ぼしているとは教科書からはとうていわからないと思った。目を向けなければ見えてこないものはやまほどある。だからこそ現代に生きる私たちは絶えず問いつづけ考えつづけなければいけないと思うし、そうでなければ「学び」とまことなどひとつもないと思った。

95.

2012年 7月16日	月曜 4時限	学籍番号	[redacted]	氏名	[redacted]